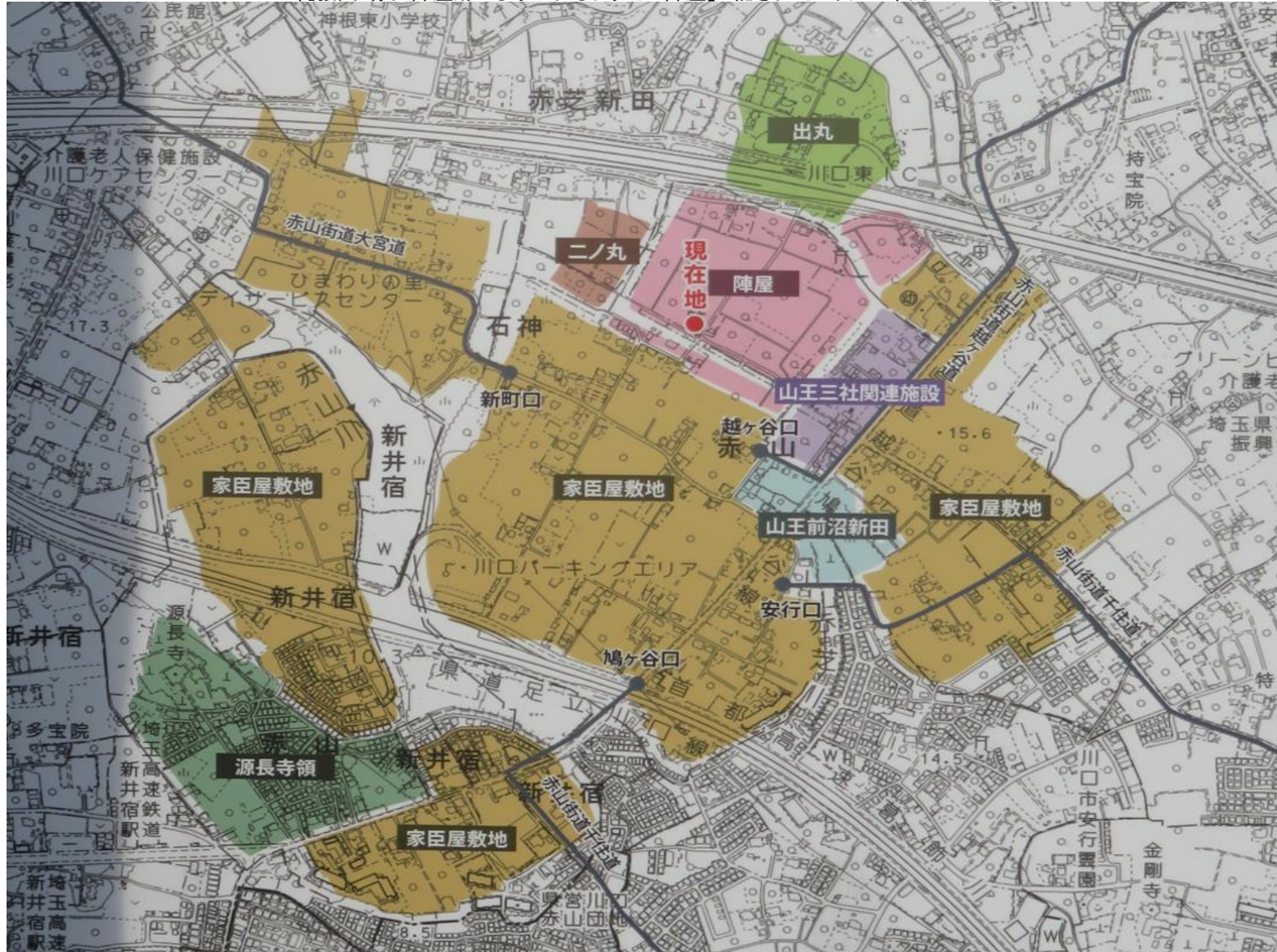


赤山城跡(川口市)

築城年代:寛永6年(1629年)、築城者:伊奈忠治

縄張図/赤山陣屋跡とも呼ばれるようだ/「陣屋」と記されたエリアが本丸/上が北

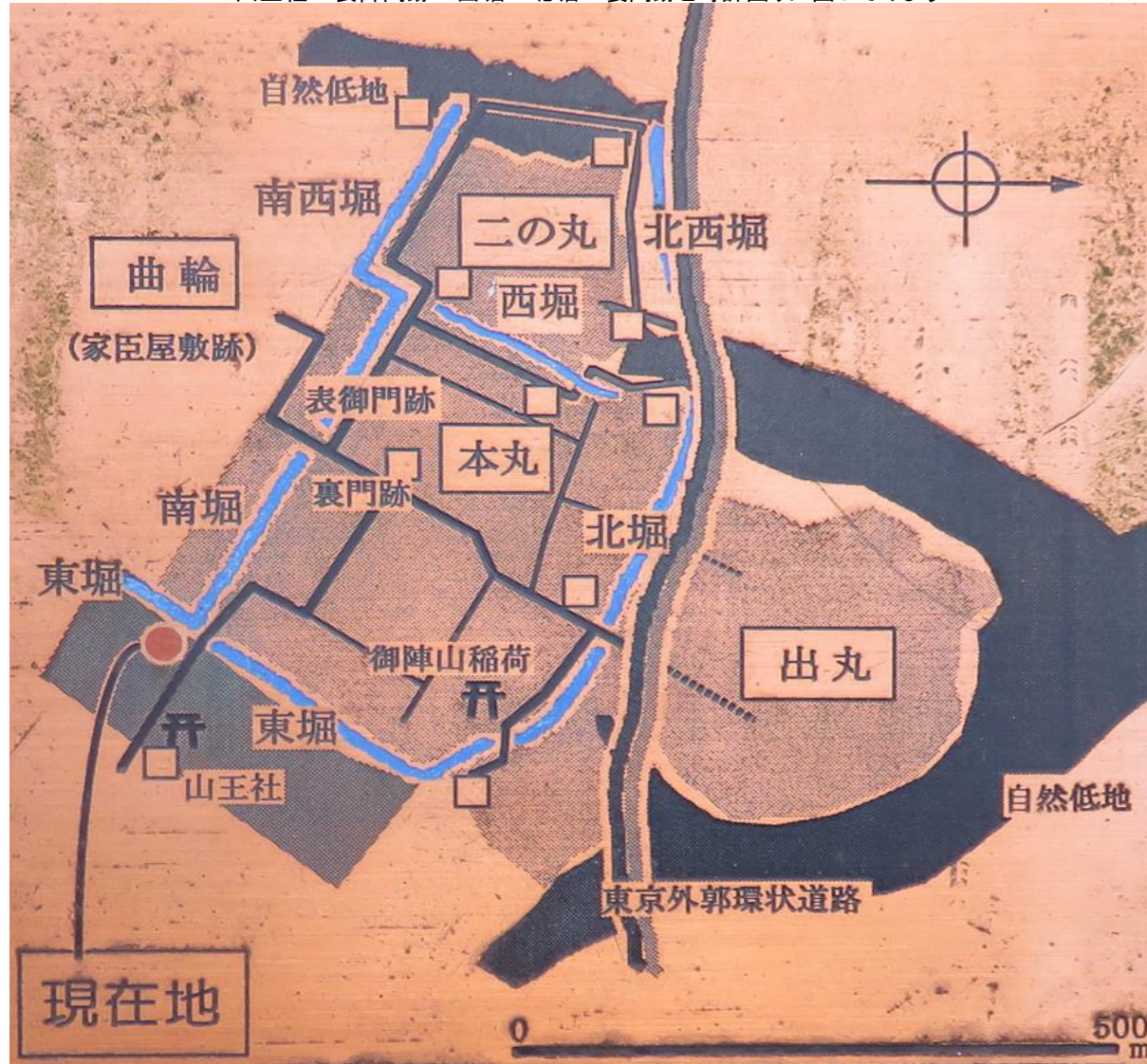


北東側から赤山城跡を見たところ/前方の木々の中央辺りが本丸のエリア

 video



山王社～表御門跡～西堀～北堀～裏門跡と時計回りに回ってみよう



ここを進むと、右手に山王社(日枝神社)が鎮座している

 video



ここが山王社(日枝神社)/正面は覆屋/様々な説明板が立っている



赤山日枝神社 御由緒

□ 御縁起 (歴史)

川口市赤山二一八

寛永年間(一六二四—四四) に関東郡代の三代伊奈忠治いなたはるが構えた赤山陣屋は、寛政四年(一七九二)、十二代伊奈忠尊ただたかが失脚するまで、関八州の貢租の徴収並びに司法、利根川・荒川の改修、新田開発など土木治水を行う中心的な役所であった。この陣屋は延べ面積二十三万四千坪にも及ぶ大なもので、この中に当社をはじめ天神社・八幡社・御陣山稲荷社などが祀られていた。当社は、陣屋の東側空堀外の山王町くわ廓の地内にある山王池に面した築山に鎮座する。この築山は、陣屋空堀掘削時の廃土で築いたと伝える。

創建は伊奈氏によるものと考えられ、恐らく江戸城鎮護の日枝神社から分社し、陣屋の守護として祀られたものであろう。『風土記稿』には陣屋廃止後の当社について、「二百年來草創せし地と見ゆ、神体昔は七体ありしが、伊奈氏断絶の時失たりと云、其頃は太橋多門或は川鍋左門など云し神主ありしが、今は領家村神明院の持となれり」とある。ちなみに、神明院は玉林院配下の本山派修験である。

なお、陣屋内にあった八幡社や天神社は現在合祀されて当社境内にある。殊に八幡社は、七代伊奈忠順ただのぶが建立した宝永四年(一七〇七)十一月の石祠銘文によると、五代伊奈忠常ただつねが寛文十三年(一六七三)七月に子孫繁栄のため創建した旨が記されている。

□ 御祭神

・ 大山咋神おおやまくいのかみ

□ 御神徳

- ・ 産業発展・成長発展・商売繁昌・家内安全
- ・ 厄除
- ・ 安産
- ・ 縁結び

□ 御祭礼日

- ・ 歳旦祭 (一月一日)
- ・ 夏祈禱なつさとう (五月十五日)
- ・ 秋季例祭 (お日待ち・十月十四日)

赤山—山王神社界隈の風景

この山王三社は、学問の神である天神社、武家の守護神である八幡社、そして徳川家に縁の深い山王社によって構成されている。三社は往時は、境内に各々鳥居を構え、別棟として建立されていたが、陣屋廃絶後幕末までは荒廃に任せていた。明治になり合祀し、赤山村の村社として祀り現在に至っている。今に残る築山は、空堀掘削時の廃土を盛り、築いたと伝えられている。

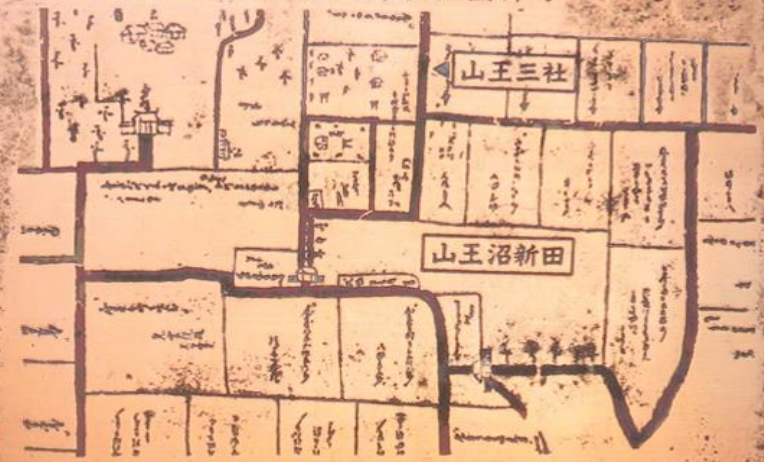
現在は、築山と参道を残すのみとなっているが、かつての社域は、参道の先に山王沼新田が広がっており、また、陣屋の守り神として鬼門にすえられた御陣山稲荷とともに、広大な陣屋の中での神域を構成していた。

八幡社は、伊奈家の守り神として赤山伊奈家三代忠常により創建された。宝永四年(1707)五代忠順は父母の報恩と伊奈家の繁栄を願い、宮域に松や杉を植えて整備し、安山岩小松石製の石祠を建立した。

「赤山陣屋絵図」の
 山王三社関係施設周
 辺をクローズアップ
 してみると、現在の
 山王神社社殿の位置
 が当時のままである
 ことが良くわかる。

さらに現在の地形
 を重ねてみると、自
 然低地を巧く利用し
 山王沼がつくられて
 いたことも読みとる
 ことができる。伊奈
 氏は、この沼で、雨
 乞いの儀式を行って
 いたと伝えられている。

山王神社界限・赤山陣屋絵図部分



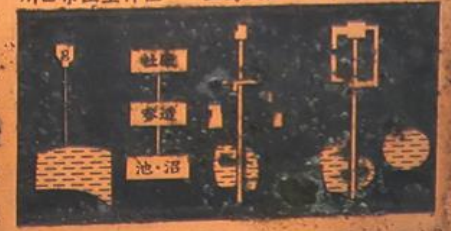
-  山王三社関係施設
-  山王沼新田
-  赤山陣屋本丸
-  四ツ門(門番屋敷)
-  家臣屋敷地
-  絵図当時の道
-  空堀



赤山陣屋絵図にある道や屋敷地を現在の地形図に重ねた

川口市山王神社 三島大社 太宰府天満宮

池・沼・参道・社殿
 という、川口山王神社と
 同様の形態を持つ神社





やぶつばき



えのき



むくぎ



くすのき



けやき



すだじい

鎮守の森は長い年月にわたって神の住む空間として、崇められ大切にされてきた。その土地の本来の自然に近い貴重な存在である。

この山王神社の森も良く保存されており、樹齢約100年～200年の常緑広葉樹と落葉広葉樹が混じって成長している。このような森の中には特有な草本として、ジャノヒゲ・ホウチャクソウなどが生育できるのである。

(主な樹木：植物図は「牧野新日本植物図鑑」北隆館より)

山王社の本殿は覆屋・狛犬と共に川口市指定文化財となっている

川口市指定有形文化財 歴史資料

八幡宮石祠

昭和52年5月10日指定

伊奈半十郎忠順が宝永四年（1707）十一月忠常の子（第二子）として、父母の報恩と伊奈家の繁栄を願って宮城を整備し、山王社の傍らに建碑した安山岩小松石製の石祠です。祠とは、ほこら・やしろ・みたまやなどの意味であることから、この石製の祠は八幡神のみたまやということになります。

裏面に刻まれた銘文は、次のように読み下すことができます。

「当初の八幡宮は、予（忠順のこと）の祖父忠常（伊奈家五代）が、寛文十三年（1673）七月朔めて建立せし所なり。予はもきまり慈母の願望有る故に、宝永四丁亥秋九月其の宮境を清めここに松杉を樹し、以て経界と為し再び其の旧制に経営す。尚乎ば神助を以て子孫の繁栄せんことを。領主伊奈源忠順之を誌す。宝永四丁亥年十一月吉辰」

川口市指定有形文化財 建造物

赤山山王権現社本殿 付覆屋・狛犬

平成6年8月18日指定

本殿は、赤漆塗りの一間社流造で、屋根は柿葺です。身舎の規模は、桁行1.667m（五尺五寸）、梁間1.545m（五尺一寸）、向拝の出は1.424m（四尺七寸）を測ります。斗栱、虹梁、木鼻などに禅宗様式の特徴が窺える一方、墓股の曲線や彫刻、虹梁の欄文様、木鼻の巧みな装飾や技法は、江戸時代初期の様式と技法を今に伝えており貴重です。

また、内部からは元禄六年（1693）墨書銘のある木製黒漆塗り金箔押し狛犬一対が発見されました。本殿の創建時期を知る上で貴重な資料であることから、覆屋と共に付指定されています。

川口市教育委員会

中央が「八幡宮石祠」(川口市指定文化財)のようだ/こちらにも説明板があった



赤山陣屋敷址

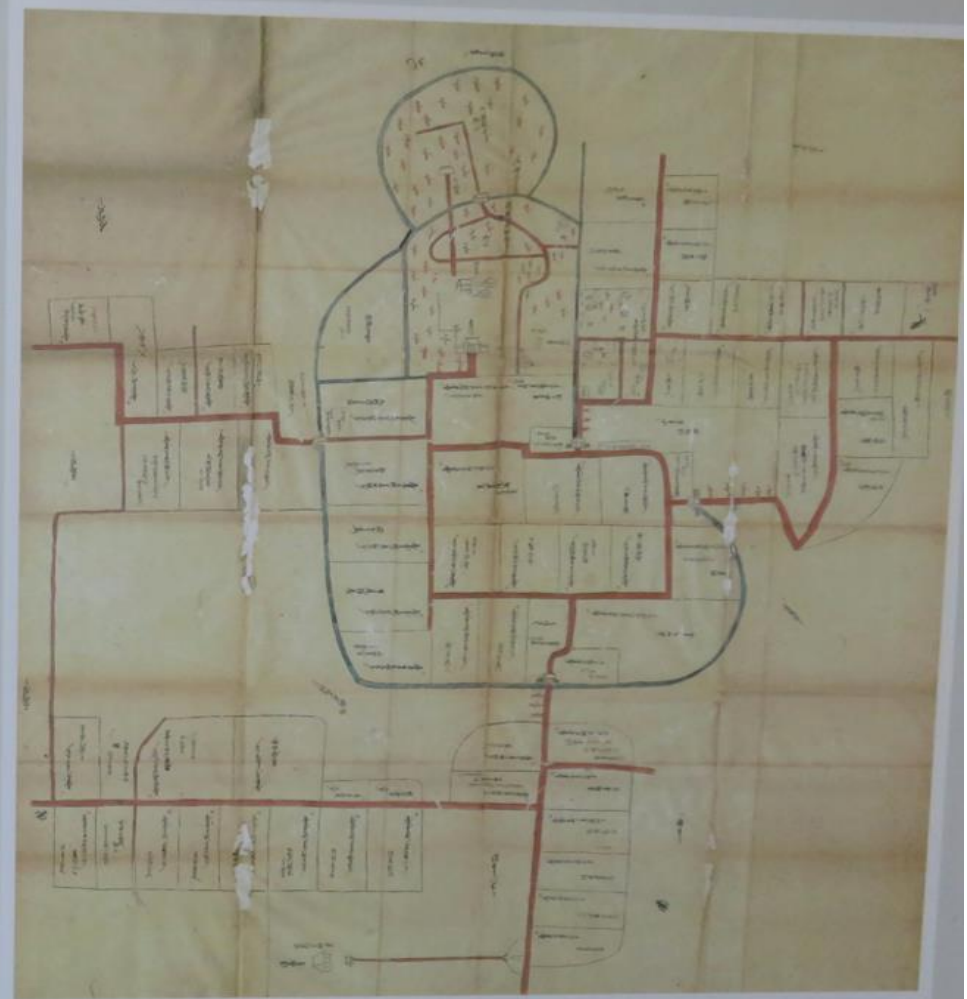
赤山陣屋は、代官(通称 岡東郡代)伊奈氏が江戸幕府の直轄地や知行地を治めるために設けた陣屋の一つで、元和4年(1618)頃伊奈半十郎忠活によって構築されたといわれています。

右図面によれば、陣屋は約77町歩(約77ha)の広さがありました。陣屋の本丸には、表御門・裏御門・御家(屋)形など5棟の建物があり、北側と西側は2重の堀でかこまれていました。外堀には水があり、内堀は空堀で、この内側には土塁が築かれていました。また東側には山王三社と家臣団屋敷、南側・西側にも家臣団屋敷がありました。この屋敷は、堀の内に17、その他に御役屋、門番屋敷などもありました。屋敷規模で一番多かったのは約1町歩(約1ha)前後のものでした。

道は一直線状にのびるのではなく、意図的にずらした食い違い、釣の手や丁字路、袋小路など防衛上の工夫がみられ、複郭を有する陣屋町を形成していました。社寺には、山王三社といわれる山王社・八幡社・天神社と、伊奈家の菩提寺であった源長寺がありました。

なお伊奈家は、寛政4年(1792)、忠活から数えて10代目の忠尊の時、幕府政治の変化と家中の騒動などが原因で改易され、赤山陣屋も廃止されました。このため陣屋の建物は取り壊されて畑地となり、今は空堀と社寺を残すのみとなっています。

令和3年3月31日
川口市教育委員会



市指定有形文化財「赤山陣屋敷絵図面」

さて、そこから北西方向に進むと前方にも説明板が見える

 video



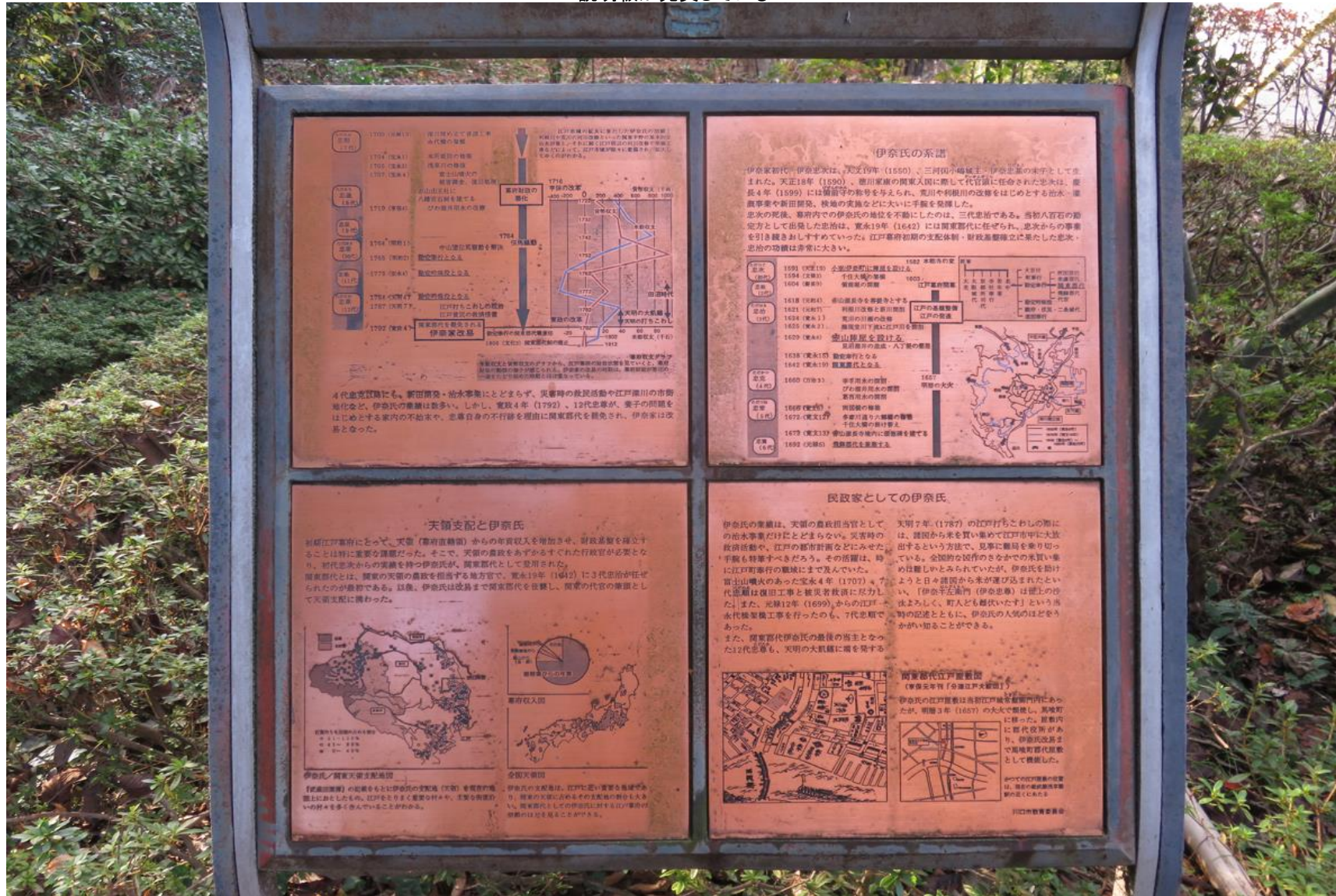
説明板の手前で左手を見ると空堀がある



堀底に下りて見たところ/これは東堀/右手は家臣屋敷跡のエリア



説明板が充実している



ただのぶ
忠順
(7代)

1700 (元禄13) 深川埋め立て普請工事
永代橋の架橋

1704 (宝永1) 本所堤防の修築

1705 (宝永2) 浅草川の修復

1707 (宝永4) 富士山噴火の
被害調査、復旧処理

ただみち
忠達
(8代)

赤山山王社に
八幡宮石祠を建てる

1719 (享保4) びわ溜井用水の改修

忠辰
(9代)

1764 (明和1) 中山道伝馬騒動を解決

ただおき
忠宥
(10代)

1765 (明和2) 勘定奉行となる

忠敬
(11代)

1775 (安永4) 勘定吟味役となる

ただたか
忠尊
(12代)

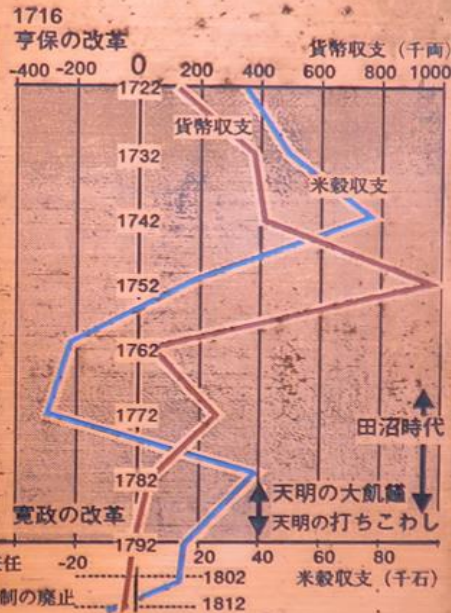
1784 (天明4) 勘定吟味役となる

1787 (天明7) 江戸打ちこわしの取捨
江戸貧民の救済措置

1792 (寛政4) 関東郡代を罷免される
伊奈家改易

幕府財政の
悪化

江戸市域の拡大に果たした伊奈氏の功績；
利根川や荒川の河川改修といった関東平野の基本的な
治水対策と、それに続く江戸周辺の河川改修や架橋工
事などによって、江戸市域が徐々に整備され、拡大し
てゆくのがわかる。



幕府取支グラフ
米穀収支と貨幣収支のグラフから、江戸幕府の財政状態を見ていくと、幕府
財政の動揺の様子が感じられる。伊奈家の改易の時期は、幕府財政が悪化の
一途をたどり始めた時期とは重なっている。

4代忠亮以降にも、新田開発・治水事業にとどまらず、災害時の救民活動や江戸深川の市街
地化など、伊奈氏の業績は数多い。しかし、寛政4年(1792)、12代忠尊が、養子の問題を
はじめとする家内の不始末や、忠尊自身の不行跡を理由に関東郡代を罷免され、伊奈家は改
易となった。

伊奈氏の系譜

伊奈家初代・伊奈忠次は、天文19年（1550）、三河国小嶋城主・伊奈忠基の末子として生まれた。天正18年（1590）、徳川家康の関東入国に際して代官頭に任命された忠次は、慶長4年（1599）には備前守の称号を与えられ、荒川や利根川の改修をはじめとする治水・灌漑事業や新田開発、検地の実施などに大いに手腕を発揮した。

忠次の死後、幕府内での伊奈氏の地位を不動にしたのは、三代忠治である。当初八百石の勘定方として出発した忠治は、寛永19年（1642）には関東郡代に任ぜられ、忠次からの事業を引き続きおしすすめていった。江戸幕府初期の支配体制・財政基盤確立に果たした忠次・忠治の功績は非常に大きい。

<p>ただかつ 忠次 (初代)</p> <p>忠政 (2代)</p> <p>ただはる 忠治 (3代)</p> <p>ただかつ 忠克 (4代)</p> <p>ただつむ 忠常 (5代)</p> <p>忠篤 (6代)</p>	<p>1591 (天正19) 小室(伊奈町)に陣屋を設ける</p> <p>1594 (文禄3) 千住大橋の架橋</p> <p>1604 (慶長9) 備前堀の開削</p> <p>1618 (元和4) 赤山源長寺を菩提寺とする</p> <p>1621 (元和7) 利根川改修と新川開削</p> <p>1624 (寛永1) 荒川の川瀬の改修</p> <p>1625 (寛永2) 権現堂川下流に江戸川を開削</p> <p>1629 (寛永6) 赤山陣屋を設ける 見沼溜井の造成・八丁堤の築堤</p> <p>1638 (寛永15) 勘定奉行となる</p> <p>1642 (寛永19) 関東郡代となる</p> <p>1660 (万治3) 幸手用水の開削・ びわ溜井用水の開削 葛西用水の開削</p> <p>1666 (寛文6) 両国橋の修築</p> <p>1672 (寛文12) 多摩川通り六郷橋の修築 千住大橋の掛け替え</p> <p>1673 (寛文13) 赤山源長寺境内に頌徳碑を建てる</p> <p>1692 (元禄5) 飛騨郡代を兼務する</p>	<p>1582 本能寺の変</p> <p>1603 江戸幕府開幕</p> <p>江戸の基盤整備 江戸の発達</p> <p>1657 明暦の大火</p>	<p>將軍</p> <p>大目付 町奉行</p> <p>勘定奉行</p> <p>勘定時味役 職府・伏見・二条城代 遠国奉行</p> <p>大老 大坂城代</p> <p>京都所司代</p> <p>老中 寺社奉行 若年寄</p> <p>西国郡代 美濃郡代 関東郡代 飛騨郡代 代官</p>	<p>1632年(寛永9年) 1670年(寛文10年) 1640(寛永17年)~ 1685年(貞享元年)</p>
---	---	---	--	--

天領支配と伊奈氏

初期江戸幕府にとって、天領（幕府直轄領）からの年貢収入を増加させ、財政基盤を確立することは特に重要な課題だった。そこで、天領の農政をあずかるすぐれた行政官が必要となり、初代忠次からの実績を持つ伊奈氏が、関東郡代として登用された。

関東郡代とは、関東の天領の農政を担当する地方官で、寛永19年（1642）に3代忠治が任せられたのが最初である。以後、伊奈氏は改易まで関東郡代を世襲し、関東の代官の筆頭として天領支配に携わった。



伊奈氏／関東天領支配地図

【武蔵田園簿】の記載をもとに伊奈氏の支配地（天領）を現在の地図上におとしたもの。江戸をとりまく重要な村々や、主要な街道沿いの村々を多く含んでいることがわかる。



幕府収入図

全国天領図

伊奈氏の支配地は、江戸に近い重要な地域であり、関東の天領に占めるその支配地の割合も大きい。関東郡代としての伊奈氏に対する江戸幕府の信頼のほどを見ることができる。

民政家としての伊奈氏

伊奈氏の業績は、天領の農政担当官としての治水事業だけにとどまらない。災害時の救済活動や、江戸の都市計画などにみせた手腕も特筆すべきだろう。その活躍は、時に江戸町奉行の職域にまで及んでいた。

富士山噴火のあった宝永4年(1707)、7代忠順は復旧工事と被災者救済に尽力した。また、元禄12年(1699)からの江戸・永代橋架橋工事を行ったのも、7代忠順であった。

また、関東郡代伊奈氏の最後の当主となった12代忠尊も、天明の大飢饉に端を発する

天明7年(1787)の江戸打ちこわしの際には、諸国から米を買い集めて江戸市中に大放出するという方法で、見事に難局を乗り切っている。全国的な凶作のさなかでの米買い集めは難しいとみられていたが、伊奈氏を助けようと日々諸国から米が運び込まれたといい、「伊奈半左衛門(伊奈忠尊)は世上の沙汰よろしく、町人ども雌伏いたす」という当時の記述とともに、伊奈氏の人気のほどをうかがい知ることができる。



関東郡代江戸屋敷図

(享保元年刊「分道江戸大絵図」)

伊奈氏の江戸屋敷は当初江戸城常盤御門内にあつたが、明暦3年(1657)の大火で類焼し、馬喰町に移った。屋敷内に郡代役所があり、伊奈氏改易まで馬喰町郡代屋敷として機能した。



かつての江戸屋敷の位置は、現在の総武線浅草橋駅の近くにあたる

赤丸が現在地

ここは陣屋の東南で、左手は東堀である。この堀は本丸と山王社社地とを画している。後方手前の鎮守の森には山王社がおかれている。

この地から雑木林越しに眺める地平線の夕日は、台地に立つ陣屋の貴重な風景の一つである。



東堀の発掘風景



- 道 —————
- 堀 (埋没部分を含む) —————
- 自然低地 —————
- 陣屋解説パネル □

伊奈氏の治水と利水ー水利事業

近世の土木史上に「伊奈流」の名を残す伊奈氏の事跡は、その支配地であった関東（旧武蔵国、現在の東京・埼玉・神奈川）のあちこちに残されている。

「伊奈流」の技術が十分に発揮されたのは、特に新田開発とそのための河川改修工事においてである。関東地方の現在の河川体系の基

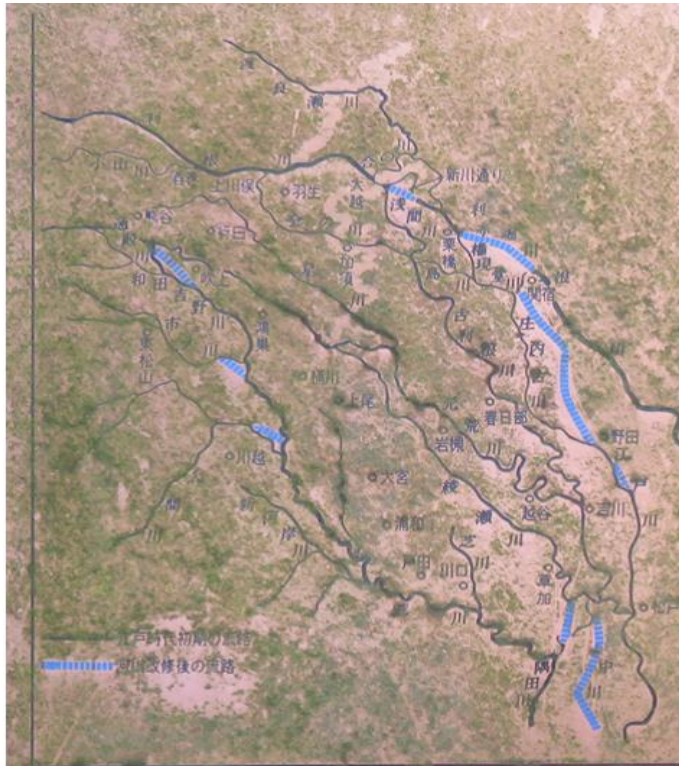
礎は、数代にわたる伊奈氏の大規模な河川整備によって築かれた。これによって関東地方東部低地帯は水害から解放され、広大な穀倉地帯に変貌していった。また、江戸とこの一帯とを結ぶ舟運も活発化し、新田開発による石高の増加とともに、江戸の繁栄を促すこととなった。



あかほりがわ

「赤堀川切広之図」（田口家文書・埼玉県立文書館蔵）

この絵図は、^{あかほりがわ}赤堀川（元和7年(1621)に伊奈忠治によって開削され、^{ただかつ}承応3年(1654)に忠克による拡張工事を経て完成）の工事の様子を描いたものである。図中には鍬やもっこを持って働く人やそれを指示する役人等が描かれており、当時の工事の状況を知る上でたいへん貴重な絵図である。



伊奈氏による河川改修

伊奈氏による関東諸河川の改修工事の代表的なものは、利根川の東遷および荒川の西遷である。これは、利根川と荒川の水系をそれぞれ切り離し、利根川を銚子沖へ流入させ（利根川の東遷）、荒川を入間川に付け替える（荒川の西遷）という、きわめて大規模なものだった。



「伊奈流」土木技術（洪水対策）

自然の地形を最大限に利用し、労力を最小限に抑える「伊奈流」の土木技術は、改修河川の洪水対策にも見ることができる。

自然堤防を利用するとともに、ところどころに低い堤防を作り、その付近に遊水池を設ける。大規模な増水の際には水をあふれさせ、遊水池に導いて水の勢いを弱めてしまう。またこの遊水池は、平常時には利井となり、用水源として利用することができた。実例として見沼溜井と八丁堤がある。

さて、更に北西方向に進むと前方にも堀跡が見える/南堀のようだ



そこで左手を見たところ/この中が家臣屋敷跡



これが南堀/北西方向に延びている/右手は本丸のエリア



ゴミは持ち帰り
ましょう。
～環境の美化にご協力を～
川口市教育委員会

少し進んで、振り返って見たところ/右手が家臣屋敷跡



更に北西方向を見たところ/右手は本丸のエリア



これは更に北西方向に進んで、振り返って見たところ/右手が家臣屋敷跡



更に北西方向を見たところ/右手は本丸のエリア



そこで、右手を見ると標柱や説明板が立っている

 video



「赤山城址」と記されている



赤^{あか}山^{やま}城^{じょう}跡^{あと}

所在地 川口市大字赤山

伊奈氏は、家康の関東入国とともに鴻巣・小室領一万石を給され、熊蔵忠次以後十二代にわたって関東郡代職にあり、関八州の幕領を管轄し、貢税、水利、新田開発等にあたった。三代忠治の時に、赤山領として幕府から七千石を賜り、寛永六年（一六二九）に小室（現北足立郡伊奈町）から赤山の地に陣屋を移した。これが赤山城で、以来十代一六三年間伊奈氏が居城したものであるが、現在では、東側に堀と土塁を一部残すのみである。

城跡の南方に隣接する源長寺は、伊奈氏の菩薩寺として、四代忠克以後の代々の墓があり、五代忠常建立の頌徳碑^{とくひ}には忠次、忠政、忠治の業績が刻まれている。

昭和五十八年三月

埼玉県

赤山陣屋配置図



伊奈氏と赤山陣屋

赤山陣屋は、赤山の地に新たに7千石を与えられ代官（通称関東郡代）の職について伊奈半十郎忠活が、元和4（1618）年頃に在支配と同業事業の拠点とするために築いたと言われています。以来、10代忠尊が改易された寛政4（1792）年までこの地に存続しました。

この陣屋は、本丸（御屋形（おやかた））と二の丸の部分だけで約110,000㎡、周囲に広がる家臣持分の土地や菩提寺である源長寺・山王神社などの付帯施設も含めると、実に770,000㎡にも及ぶ広大なものです。

伊奈氏は、用水の開削や新田開墾など、治水・利水事業に数多くの業績を残したことで、歴史上に特にその名が知られております。

このことから、水辺の文化をはぐくんできた川口のあゆみをひもとくとき、赤山陣屋址は先人の偉業を偲ぶことのできる、最も重要な遺跡の一つであるといえましょう。そしてこの遺跡の中には、水害と戦った伊奈氏にふさわしく、水神やその化身としての大蛇にかかわる伝説や民話がたくさん伝えられているほか、創建当初からの道も、生活道路として現在も利用されており、赤山道という名も今に残されています。もちろん、陣屋のたたずまいを示す空堀や土塁も残っています。

左の図は、赤山陣屋敷絵図面（市指定文化財）をもとに、現在の地形図の上に陣屋の配置を描いたものです。陣屋全体が自然の低湿地によって囲まれ、主要な入口には門番が配置され、「四ツ門」と呼ばれていました。また、本丸と二の丸は人工の空堀によって囲まれています。これら陣屋の構造から、伊奈氏の卓越した土木技術をうかがい知ることが出来ます。つまり赤山陣屋址は、近世初期に発達した、伊奈流（備前流）と称される土木技術の粋を集めた、代表的な遺跡であると言えます。

代官(関東郡代)伊奈氏の事績

赤山

- 元和 4年(1618) 赤山に陣屋を設ける(年代については諸説あり)。赤山に源長寺を開基し、伊奈家菩提所とする。
- 元和 7年(1621) 利根川通り、新川通りと赤堀川の開削を開始し、利根川の東遷事業に着手する。
- 元和9年(1615-1624) 常盤橋御門内屋敷を引き継ぐ。
- 寛永 6年(1629) 八丁堤を築き、足立郡見沼灌井の造成を開始する。荒川を締め切り、入間川筋(現荒川)へ流れを移す(荒川の西遷)。
- 寛永10年(1633) 栗橋・松戸・市川等の関所を掌管する。
- 寛永12年(1635) 勘定頭(後の勘定奉行)に任せられる。
- 寛永19年(1642) 勘定頭を免ぜられ、かわって関東河川の修治と代官の監督を命ぜられる。
- 寛永24年(1624-1644) 小菅御酒地10万坪(12万坪とも言われる)の屋敷を拝領する。
- 承応 2年(1653) 玉川上水開削の奉行となる。
- 享徳年間(1652-1655) 利根川の東遷事業を完成させる。
- 明暦 3年(1657) 明暦の大火で焼失した常盤橋御門内の屋敷の替え地として、馬喰町に屋敷を拝領する。
- 万治 3年(1660) 幸手用水を開発する。
- 寛文 4年(1664) 奥州福島12万石支配を命ぜられる(～同10年忠常まで)。
- 寛文12年(1672) 両国橋、多摩川六郷橋を修築する。
- 寛文13年(1673) 赤山源長寺境内に鎮徳碑を建立する。
- 延宝 2年(1674) 関東総検地の奉行となる。
- 元禄 5年(1692) 飛騨一國四万四千石の支配を命ぜられ、飛騨代官を兼務する(～忠達まで)。
- 元禄11年(1698) 深川永代橋を架橋。深川墓地の造成や市街地造成にあたる。
- 宝永 5年(1708) 富士山噴火被災地の支配を命ぜられ、その地の復興にあたる。
- 享保 元年(1716) 鷹場制度の復活に参画し御鷹野役所を掌管する。
- 享保 4年(1719) 葛西用水路の造成で参画を受ける。
- 明和 元年(1764) 京、大阪において新田を檢地、淀川を巡検する。中山道伝馬騒動を鎮圧する。
- 明和 2年(1765) 勘定奉行を兼務し、従五位下備前守に叙任する。
- 天明 元年(1781) 上州絹一揆を鎮める。
- 天明 7年(1787) 江戸打ち毀し騒動を鎮圧する。
- 寛政 元年(1789) 馬喰町の屋敷が焼失する。
- 寛政 3年(1791) 忠尊の養子忠尊、赤山での検見先から比叡山に出奔する。
- 寛政 4年(1792) 代官職を罷免され、改易に処せられる。親族の忠政が新たに1千石を与えられる。旗本として家名が存続され、この後、忠政・忠信・忠行と三代にわたって一般の代官として復職する。



- ### 小室
- 天正18年(1590) 徳川家康、関東に入封する。武蔵国小室・薄葉領1万3千石(1万石ともいわれる)を所領する。小室開削井坊を倉田明屋院に移し、小室に陣屋を設ける。
 - 文禄 3年(1594) 利根川通りの会野川締め切り工事を行う。
 - 慶長 元年(1596) 武蔵国大宮氷川神社を再建する。
 - 慶長 5年(1600) 関ヶ原の戦い
 - 慶長 8年(1603) 徳川家康、征夷大将軍となり、江戸に幕府を開く。
 - 慶長 9年(1604) 武蔵国児玉郡から水を引き入れ、備前渠・備前堤を築く。
 - 慶長15年(1610) 忠次、57歳にて没し、薄葉勝願寺に葬られる。
- 忠政死後、三代目忠勝早世により絶家となるが、弟忠隆が小室(現埼玉県伊奈町)に新知1,186石余を開り、以後旗本として存続する。

代官伊奈氏と赤山

伊奈氏は、信濃国伊奈郡(伊那郡)の出身とされ、そこから「伊奈」姓を称したといえます。やがて三河の徳川家仕えることになりました。

初代忠次は、河川改修や新田開発、領内総検地等に手腕を発揮するなどして功績を重ね、代官頭として、武蔵国足立郡小室(現在の埼玉県伊奈町)に陣屋を構え、家康の領国経営や、幕府成立後の政治・経済基盤の拡充に尽力しました。

忠次の没後、地方支配に関わる権限は、次男の忠治が継承します。忠治は、常盤橋御門内(のちに馬喰町)に屋敷を構え、新たに拝領した赤山領7,000石余の知行地に陣屋を築いて、関東の幕府直轄領を支配する代官として活躍しました。また、忠治は、荒川の西遷事業や、忠克の代に完成する利根川の東遷事業に着手するなど多くの実績を残していきます。

その後、赤山陣屋は、寛政4年(1792年)に忠尊が改易されるまでの約170年もの長きにわたり脈々と引き継がれ、この間の伊奈氏の業績の数々は、多くの民衆から慕われ、後世まで語り継がれていくこととなります。

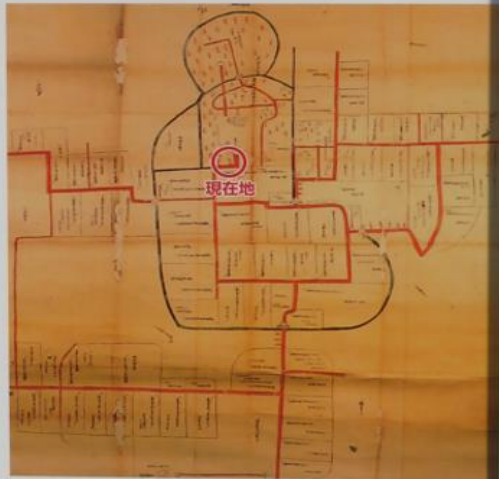
代官伊奈氏と赤山

伊奈氏は、信濃国伊奈郡(伊那郡)の出身とされ、そこから「伊奈」姓を称したといえます。やがて三河の徳川家仕えることになりました。

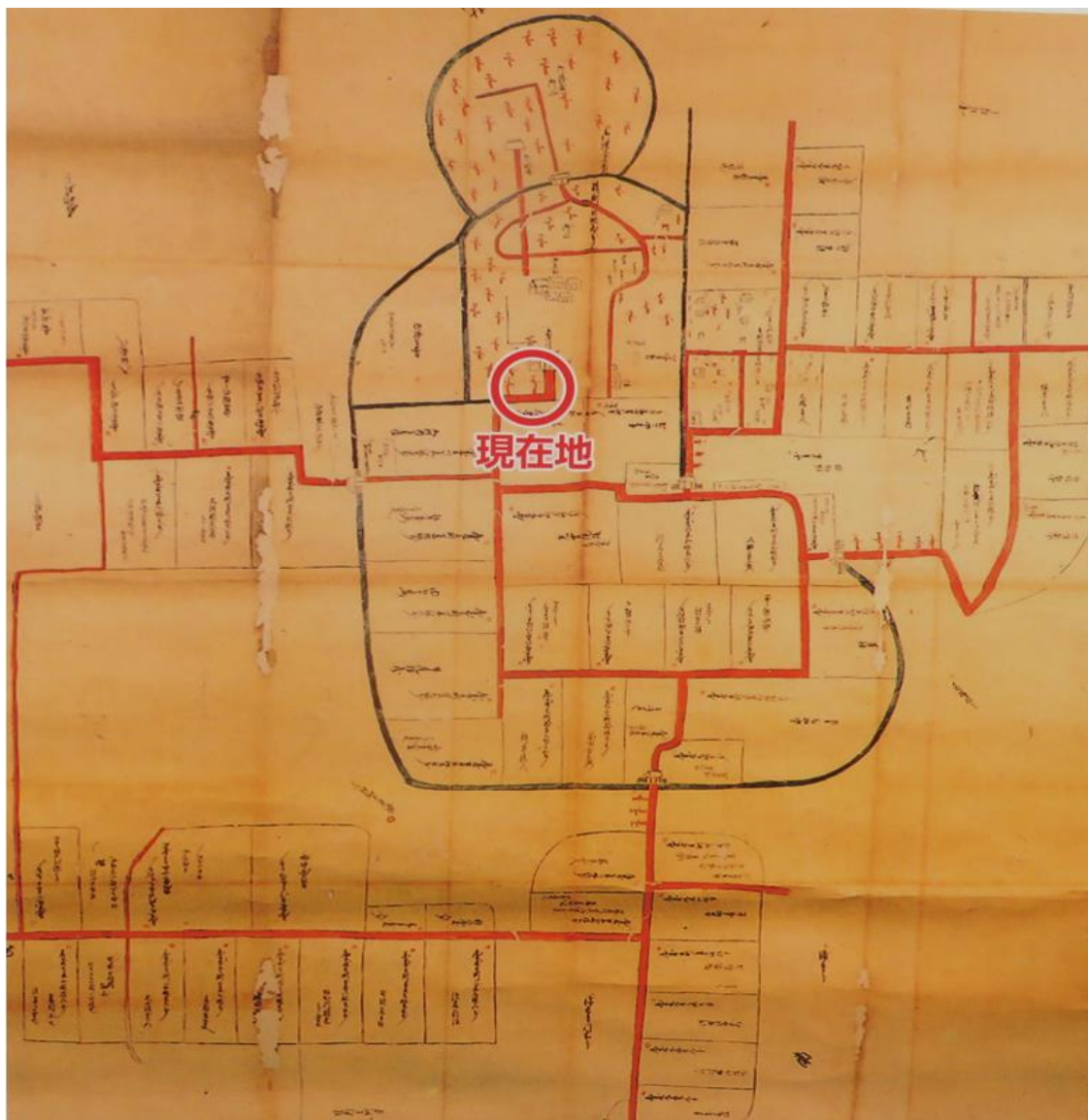
初代忠次は、河川改修や新田開発、領内総検地等に手腕を発揮するなどして功績を重ね、代官頭として、武蔵国足立郡小室(現在の埼玉県伊奈町)に陣屋を構え、家康の領国経営や、幕府成立後の政治・経済基盤の拡充に尽力しました。

忠次の没後、地方支配に関わる権限は、次男の忠治が継承します。忠治は、常盤橋御門内(のちに馬喰町)に屋敷を構え、新たに拝領した赤山領7,000石余の知行地に陣屋を築いて、関東の幕府直轄領を支配する代官として活躍しました。また、忠治は、荒川の西遷事業や、忠克の代に完成する利根川の東遷事業に着手するなど多くの実績を残していきます。

その後、赤山陣屋は、寛政4年(1792年)に忠尊が改易されるまでの約170年もの長きにわたり脈々と引き継がれ、この間の伊奈氏の業績の数々は、多くの民衆から慕われ、後世まで語り継がれていくことになります。



赤山陣屋敷絵図面
(個人蔵)



そこで、南東方向を見たところ



振り返って、北西方向を見たところ/この辺りが表門跡か・・・



表門跡付近まで進んで、南東方向を見たところ



この辺りが表門跡か・・・



そこで、北東方向に本丸を見たところ

 video



更に北西方向に進むと、この先で堀は左手(南西方向)に折れている

 video



こんな塩梅/左手に折れ、その少し先でまた右手に折れて南西堀に続いているようだ



そこで、振り返って南東方向を見たところ



左上から堀跡を見たところ



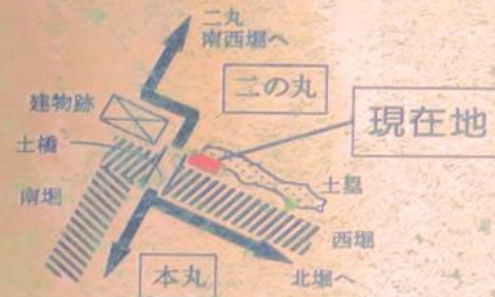
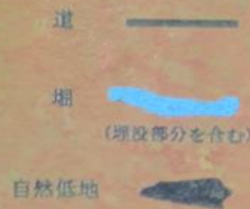
そこで、左手(北東方向)を見るとその先にも堀(西堀)が巡っていた/左手に説明板もあった

 [video](#)



赤山陣屋

ここは、西堀・南堀・南西堀が出合う要所だった。地形にあわせて、南堀は浅めに、西堀は深めに掘られていた。西堀や土塁を越える土橋のあとも見つまっている。



西堀の左手(北西側)を見ると平場があり、ここが二の丸のようだ

 video



このマウンドは何だろう・・・



西堀沿いに北東方向に進んで、振り返って見たところ/右手が二の丸/説明板がある



堀底を南西方向に見たところ



これは説明板の右手を見たところ/前方の竹林のエリアが二の丸/この遊歩道はその手前で右手(北東方向)に折れている

 video

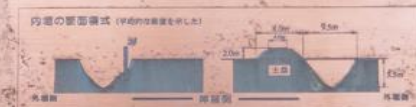


赤山陣屋の堀

赤山陣屋は、周囲の自然の低湿地を外堀として利用し、その内側に人工の内堀をめぐらせている。陣屋に接する自然低湿地の総延長は約3,000mに及び、深さは概ね10mだが、幅が広いゆえに、堀地であったため足場が悪く、堀としての機能を十分備えていたと思われる。



内堀には、東堀・西堀・南堀・北堀・南西堀・北西堀があり、総延長は1,800mに及んでいた。発掘調査によりさまざまな形態・規模を持つことが確認されたが、概ね深さ5~6m、上面幅9.5mほどで、堀の内部に堀が建てられていたところや、堀に沿って土塁のあるところもみられた。

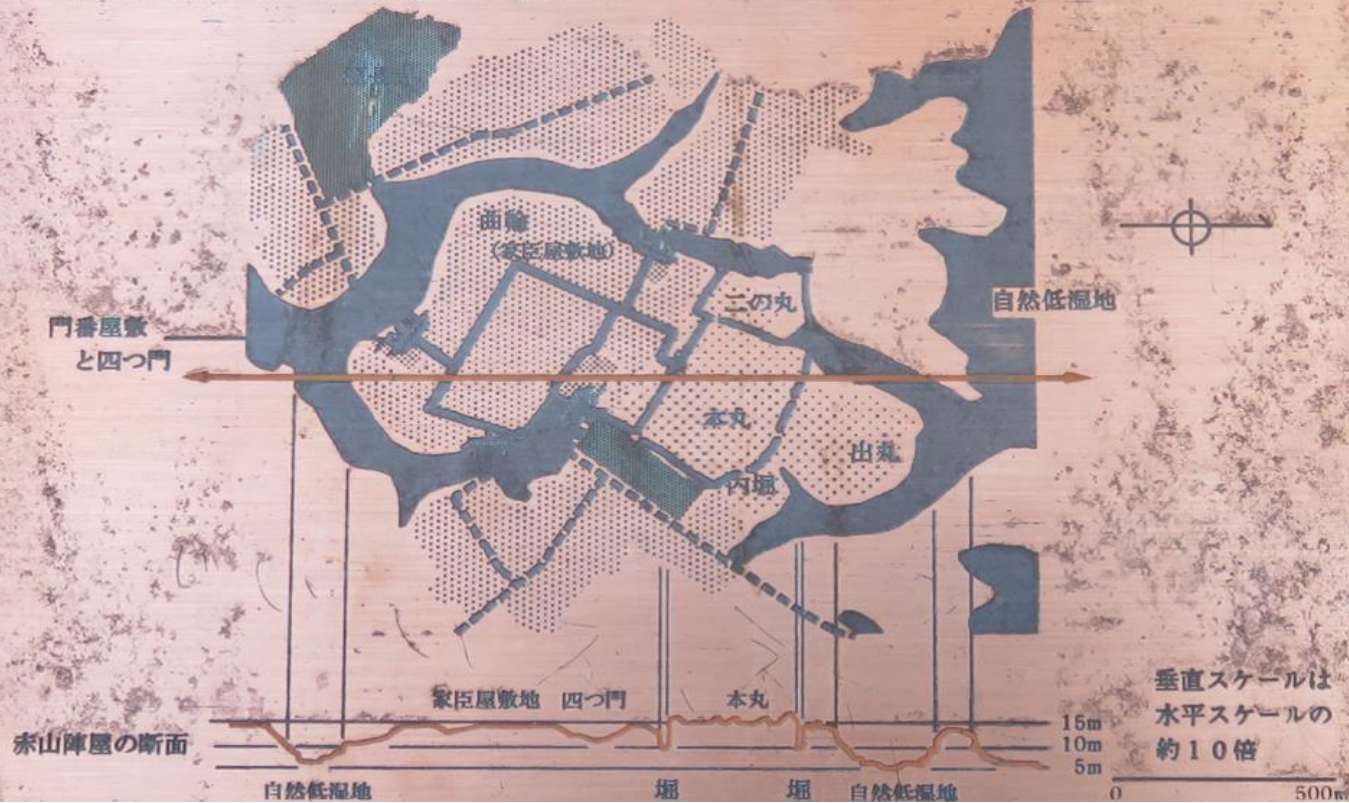


中でも最大規模の北西堀は、深さ8~9mで高さ1mの土塁をもち、有事には東側の低湿地から水を引き込んで水堀としても使えるようになっていた。自然低地の切れめにあたる部分だったため、このように大規模なものとなったのだろう。また、自然低地の切れ目の山王社の東堀が埋めにつくられているなど、細かな配達がそれぞれの堀にみられる。

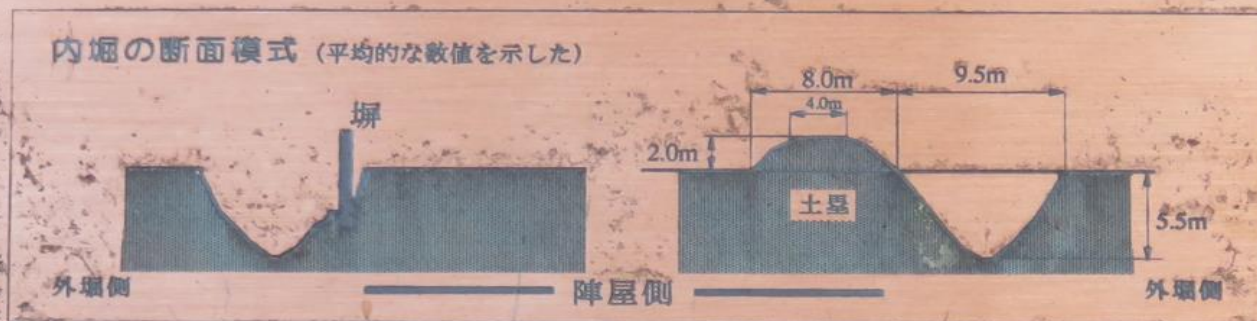
仮に北側から陣屋内に入ろうとすると、外堀（低湿地）と内堀、そして土塁を合わせ延べ17m上り、17m下らなくてはならないことになる。これは、5~6階建てのビルを階段で上り下りするのと同じか、足踏の悪さを加味するとそれ以上の運動量に匹敵する。赤山陣屋を囲む堀の効果は、想像以上のものであったに違いない。

赤山陣屋の堀

赤山陣屋は、周囲の自然の低湿地を外堀として利用し、その内側に人工の内堀をめぐるせている。陣屋に接する自然低湿地の総延長は約3,000mに及ぶ。深さは概ね10mだが、幅が広いいうえに、湿地であったため足場が悪く、堀としての機能を十分備えていたと思われる。



内堀には、東堀・西堀・南堀・北堀・南西堀・北西堀があり、総延長は1,800mに及んでいた。発掘調査によりさまざまな形態・規模を持つことが確認されたが、概ね深さ5～6m、上面幅9.5mほどで、堀の内部に塀が建てられていたところや、堀に沿って土塁のあるところもみられた。



中でも最大規模の北西堀は、深さ8～9mで高さ1mの土塁をもち、有事には東側の低湿地から水を引き込んで水堀としても使えるようになっていた。自然低地の切れめにあたる部分だったため、このように大規模なものとなったのだろう。また、自然低地の切れる山王社側の東堀が深めにつくられているなど、細かな配慮がそれぞれの堀にみられる。

仮に北側から陣屋内に入ろうとすると、外堀(低湿地)と内堀、そして土塁を合わせ延べ17m上り、17m下らなくてはならないことになる。これは、5～6階建てのビルを階段で上り下りするのと同じか、足場の悪さを加味するとそれ以上の運動量に匹敵する。赤山陣屋を囲む堀の効果は、想像以上のものであったに違いない。

右手(北東方向)を見ると。この先も西堀が続いているようだ



竹林の中の二の丸を覗いたところ




その左手の様子



さて、竹林沿いに北東方向に進んで行くと、地形は段々と下がっている



こんな塩梅

 video



振り返って、南西方向に西堀を見たところ

 video



更に下って行くと説明板があった



これは下り切って左手(北西方向)を見たところ/この先が北西堀のようだ



そこで、振り返って南東方向を見たところ/この先は北堀

 video



北堀沿いに南東方向に進む/右手が本丸のエリア



右手に本丸を見たところ



同じく、その少し先で右手の本丸を見たところ



更に南東方向を見たところ/この先に御陣山稲荷があるようだが、時間の関係で右手に入って行くことにする/左手は出丸のエリアになっている



右手に折れて、南西方向を見たところ/左手に説明板がある

 [video](#)



赤山 - 陣屋敷界隈の風景

赤山陣屋は、伊奈家3代当主・伊奈忠治ただはるが寛永6(1629)年に築いたものとされている。寛政4(1792)年に12代忠尊ただたかが関東郡代を罷免され改易に処せられるまでの163年間、伊奈氏による治水・新田開発の拠点となっていた。

伊奈氏の行ったこれらの事業は、江戸時代における一大国家プロジェクトともいえる規模であり、幕府財政の基礎固めに赤山陣屋の果たした役割は大きかった。

ミニデータ

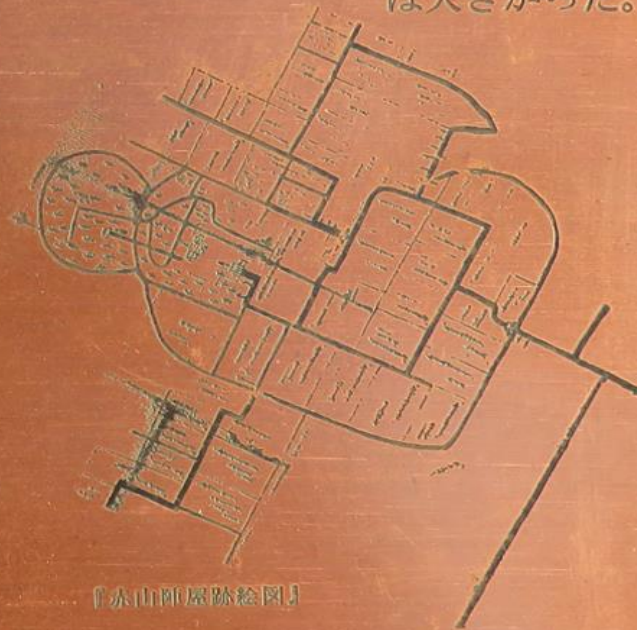
本丸+二の丸 110,000㎡

本丸+二の丸+家臣屋敷
770,000㎡

堀(内堀)総延長 1,800m

自然低地(外堀)陣屋に接
する部分の延長 約3,000m

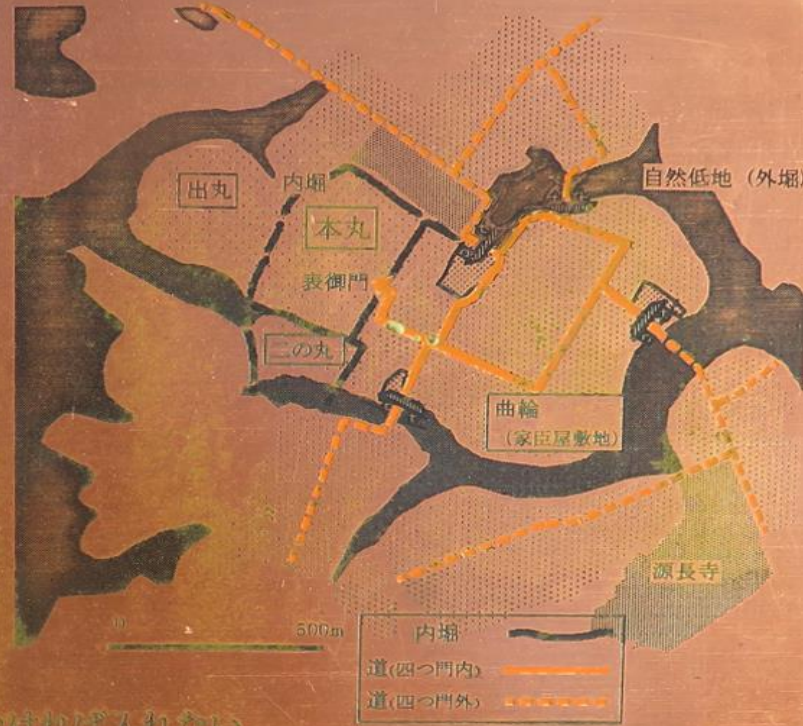
総延長4,800mのうち63%は自然地形を活用したこととなる



『赤山陣屋跡絵図』

陣屋の構造

- 自然低湿地（外堀）と内堀で二重に囲まれた本丸。
- 本丸には曲輪（家臣屋敷地）から表御門くわがたを通る道一本のみである。
- 四方から集まる道はすべて曲輪にある環状道路につながる。
- 曲輪には、四方の街道の門（四ツ門）を通らなければ入れない。
- 四ツ門にそれぞれ門番屋敷があって、門の管理に当たる。
- 曲輪の環状道路は外部から見えにくい屋敷地の内側を通っている。



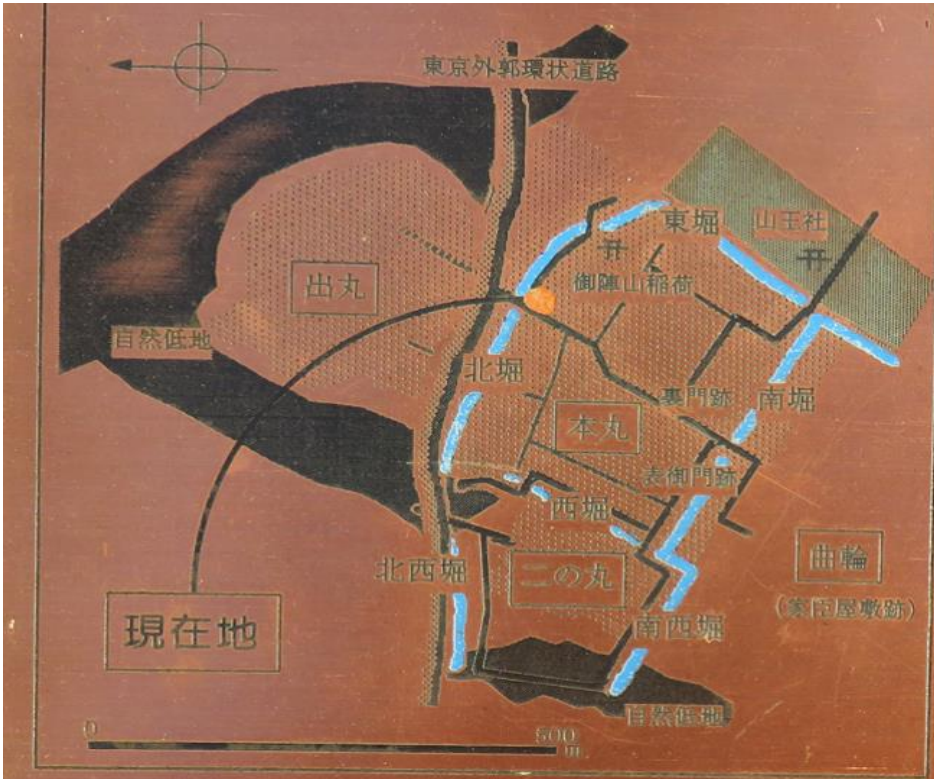
地形の利用、土地の利用と屋敷の配置、街道との接続方法と門番の配置等の基本的な守りの構造を重ねることで、有事の際の防衛的機能を高めたと考えられる。

陣屋の規模

赤山陣屋は本丸、二の丸、出丸、そして家臣屋敷地等で構成され、その規模は全体で77haと広大である。ちなみに本丸と二丸だけでも11haもあり、東京ドームはおろか、後樂園遊園地まですっぽりと収まってしまふ。陣屋は周囲の低地に囲まれた台地に築かれ、自然低地を陣屋の外堀とすることでその構築に際しては大幅

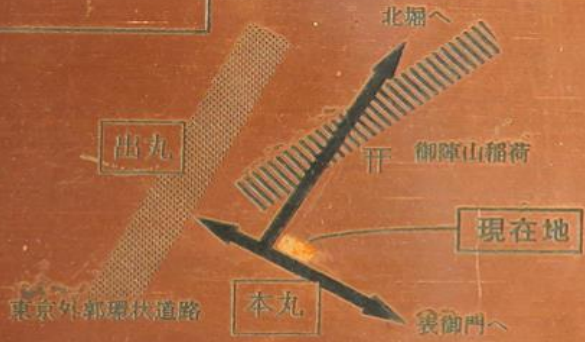
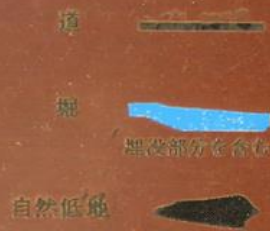
に工事期間と手間を省くことができたはずである。逆にこの地形を利用することで、陣屋の規模が決められたのかも知れない。伊奈流と言われる優れた伊奈家の土木技術の背景にはこの自然に逆らわずに無駄な工事を避けた合理的な計画のセンスが見られる。





ここは北堀の中心部分で、出丸へ渡る土橋が設けられていた。

東には陣屋の守り神である御陣山こじんやま稲荷いなりがある。



そこから南西方向に進みながら、本丸を見たところ



同様に北西方向

 [video](#)




反対側(南東方向)

 video



ここにも説明板があった

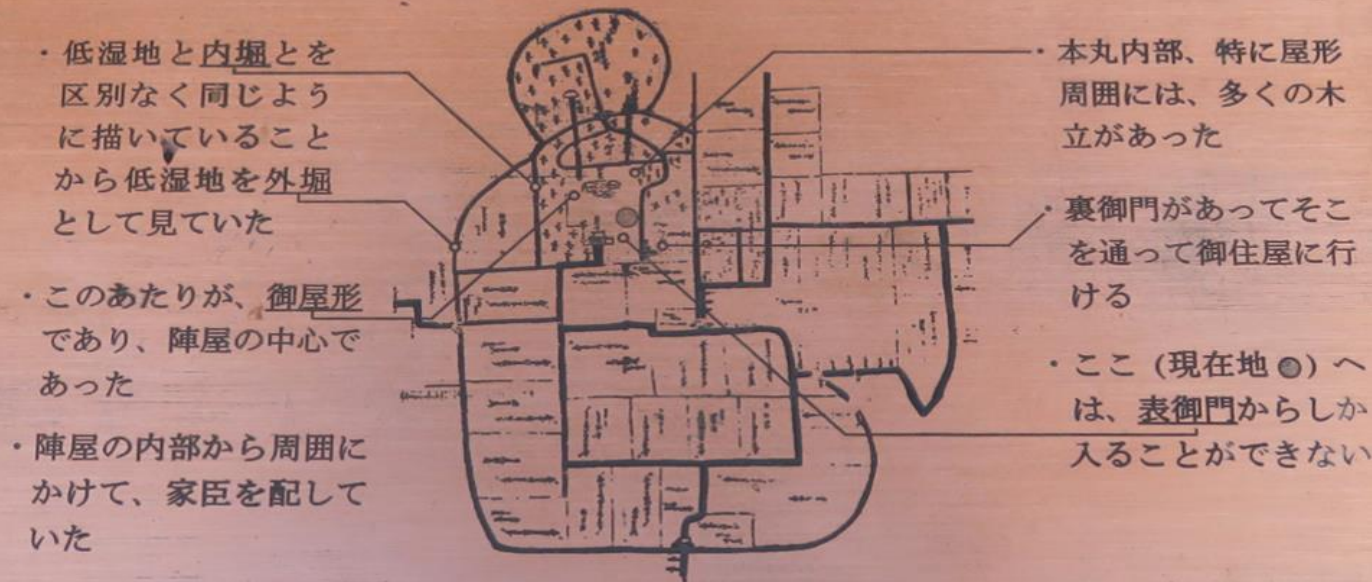
 video



『赤山陣屋絵図』

赤山陣屋の当時の姿を探る手がかりとなる資料の一つに『赤山陣屋跡絵図』がある。製作年代は不明だが、絵図には、街道と道、堀、屋敷、木立、門、神社、家臣名が描かれている（但し、南堀は書き込まれていない）。

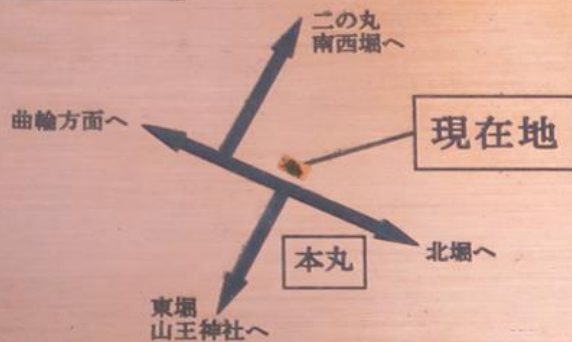
道路の取りつきや堀の書き込みが現況とほぼ一致することからも、当時の様子を知る上で貴重な資料である。





このあたりは、
本丸の中央部分で
ある。

赤山陣屋跡絵図
に描かれている、
本丸を南北に通る
中央の道が、現在
のこの道に相当す
ると思われる。



参考ホームページ

<http://ivokakuzukan.la.coccan.jp/011saitama/046akayama/akayama.html>

<http://yogokun.my.coccan.jp/saitama/kawagutisi.htm>

<http://www.ukima.info/meisho/kawaguti/akayama/akayama.htm>

<http://www.ukima.info/meisho/kawaguti/akayama/map.htm>

<https://www.otsukastone.co.jp/blog/6299>

<http://www.otsukastone.co.jp/blog/6361>

<https://sites.google.com/a/onodenkan.net/lie-dao-cheng-zhi-ji-xing/qi-yu-xian/chi-shan-zhen-wu>

